

# 京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を



株式会社 京都建築事務所  
代表取締役社長 細見 建司

〒604-8083

京都市中京区三条通柳馬場東入  
中之町 10 番地

TEL:075-211-7277

FAX:075-211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>



医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

## 第31回社会福祉研究交流集会 in 京都のご案内

\*\*\*\*\*

31回目となる今年の研究交流集会は、古都・京都で開催します！  
福祉現場に携わる人々、当事者やその家族、研究者、そして運動に関わる人びとなど、さまざまな立場からの経験や悩みを持ち寄り、対話と交流を通して、「これからの社会福祉」をともに考えていきたいと思えます。詳細については、順次ご案内いたします。

**日時：2026年8月29日（土）13時**

**～30日（日）15時**

**場所：大谷大学本部キャンパス 地下鉄「北大路」駅から徒歩**

1日目のプログラム終了後、懇親会も予定しています！

〈主催・問合せ〉総合社会福祉研究所

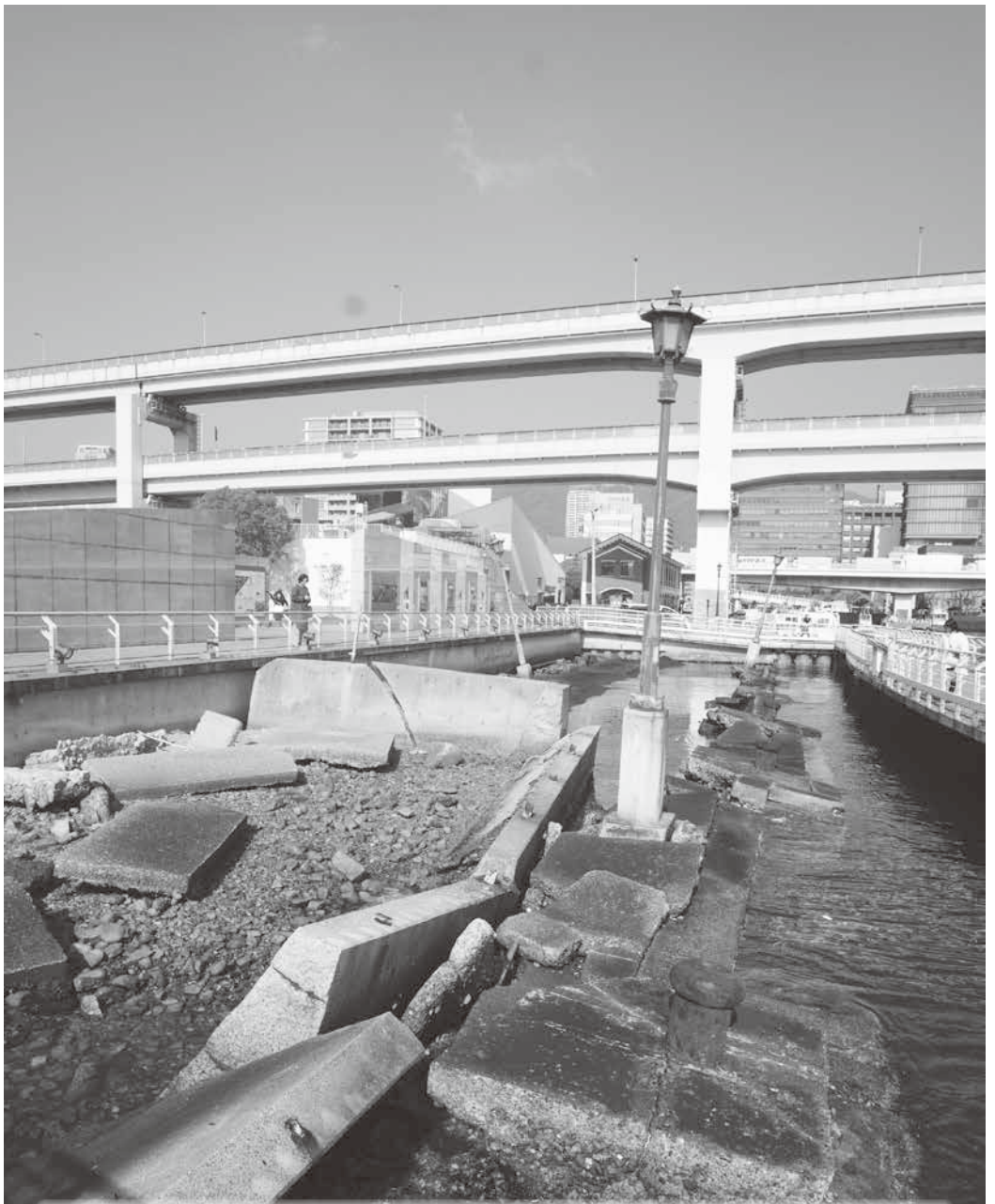
TEL06-6779-4894 E-mail : [mail@sosyaken.jp](mailto:mail@sosyaken.jp)

# 阪神・淡路大震災 31年目

—記憶をどう紡いでいくか—



多くのボランティアが参加し、神戸市中央区東遊園地で毎年営まれてきた「阪神・淡路大震災1・17のつどい」（同実行委員会主催）。発災時間は早朝だったため、12時間前の1月16日午後5時46分にも震災の犠牲者をいたみ、黙とうがおこなわれています。この時間には、近隣の学校生徒や子ども連れでの参加者がたくさんこられていました。紙灯籠をならべて今年の言葉「つむぐ」を表現します。紙灯籠への点火はろうそくを使って参加者がおこないます。



神戸港震災メモリアルパークには、震災で被害を受けた神戸港の岸壁の一部が保存されていて、大地震の莫大なエネルギーの爪痕を実際に見ることができます。QRコードを読み取ると、震災直後のこの場所の写真や、詳細な情報を見ることができます。震災によって岸壁はもとの位置から最大490センチメートル横方向に動き、最大230センチメートル沈み込んで崩れ落ち、船をロープでつなぎとめるための突起や照明灯は海に押し出され、大きく傾いています。この日も、何人かの地元の人や観光客がたたずみ、スマホを向けている姿がありました。



神戸市長田区は、神戸市全体の焼失延べ面積の64%にあたる52万4,000㎡が地震後の火災で焼けました。その後、まちは大規模な区画整理みくらがなされ、延焼を防ぐためなどの理由で公園が設けられました。そのうちの一つである御蔵北公園には、焼け残った電柱が1本だけ残されています。石碑には、「震災後の区間整理事業で街並みは全て変わった。この電柱だけが撤去・移転を免れ当時の『現地』を示す唯一の証人です」とありました。同じ公園には、同地区で亡くなった人たちをしのぶ慰霊碑もありました。



同区の長田神社の参道入り口にある石の鳥居は、ごまいぬ 灯籠、狛犬ともども震災で倒壊しました。再建された鳥居のそばには、折れた鳥居の一部が保存されています。折れた部分は風雨によるものか少し削られたように見え、月日を感じさせられました。

町並みはきれいに整えられ、震災を直接経験していない人が増えるなかで、自然災害の脅威を伝え、災害対応の教訓を活かそうとさまざまな工夫がなされています。博物館のような施設に資料を集め、系統立てて整理し伝えていくことはもちろん大切ですが、日常のなかで身近に目にすることができる場があることも、記憶を継承していくために重要な役割があると感じました。

(写真・文 中島素美)

## 【ひろばトーク】

「交差性」が見えてくる場所 市民共同発電の実践から 今井絵里菜 6

### ●特集● 真田理論の現場的意義を考える ～第30回合宿研究会 in 京都～

抵抗の主体としての福祉労働	深谷 弘和	12
福祉労働者へのエールとしての真田理論	佐々木 宏	14
今日的な福祉問題を真田理論から捉える意義	大原 ゆい	16
福祉労働論の視点から「現場のモヤモヤ」を可視化する	北垣 智基	18
社会福祉事業経営の立場から考える	小堀智恵子	20
実践と運動の継承のために	清水俊朗・大川彩子	22
社会保障・社会福祉発展の第3段階に向けて	浜岡 政好	24
参加者からの感想		26

### ●トピックス●

被害の全面回復を！ いのちのとりで裁判 ～だまってへんでこれからも～	雨田 信幸	30
千葉県一時保護所裁判の意義と労働組合の課題	堀場 純矢	34
気づきとまなびを「伝える力」が育つ ～第38回社会科学・社会福祉基礎講座、修了しました！～		40
『福祉のひろば』のこれから	石倉 康次	42
「花咲け！ 男やもめ」連載終了		45

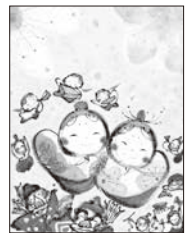
### ●連載●

阪神・淡路大震災発生から30年 最終回 被災者への公的支援の拡充をめざして〈後編〉	高山 忠徳	48
なかまと職員と家族と、ともに築く暮らしの場 自らの人生の主人公でいられるように	川尻 七美	52
続・ヘルパー歳時記 信頼関係の積み重ねのなかで②		56
世界のソーシャルアクション！ 社会のしくみとしての困難に向き合う（イギリス・後編）	中野加奈子	60
JOB & ACTION 全国福祉保育労働組合（60） 福祉保育労26春闘方針を確立！		62
私の履歴書 社会福祉経営全国会議（60） 地域に根ざした福祉運動の歩み	墨 光子	64
阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎（80）	水野阿修羅	66
育つ風景 「給食と保育のセミナー in あいち」に参加して	清水 玲子	68
映画案内 『蜜蜂と遠雷』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて 大原孫三郎・總一郎、山川均・菊栄、石井十次 （その6・青山菊栄の登場と結婚）	生田 武志	72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート 世界を転がすサイコロじゃ！	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ	77

## 福祉のひろば

2026年3月号

### ●表紙の絵● 神門やす子



みんなのポスト 46／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● 阪神・淡路大震災 31年目  
——記憶をどう紡いでいくか——

# 「交差性」が見えてくる場所 市民共同発電の実践から

一般社団法人市民共同発電サンサンすいた理事 今井 絵里菜

「インターセクショナルリテイ（交差性）」という言葉聞いたことがあるでしょうか。ジェンダー、人種、貧困、障がい、労働など、複数の社会課題が重なり合い、その重なりの中で不利益が生じる構造に目を向ける考え方です。真に公正な社会を実現するには、単一の問題としてではなく、複合的に捉える必要があるとされています。

私は若い世代が声を上げる気候変動対策の運動にかかわるなかで、この言葉を何度も耳にしました。頭では理解できても、どこか実感を伴わない概念でした。その意味がやっと腑に落ちてきたのが、市民共同発電所づくりの活動をはじめからです。

市民共同発電とは、市民や地域が資金を出し合い、再生可能エネルギーの発電所を設置・運営し、その収益を協力者や地域社会に還元するしくみです。私は大阪府吹田市を拠点に仲間と準備をすすめ、二〇二五年三月には、市内の特別養護老人ホーム「いのこの里」の屋根上に、一号機となる太陽光発電所を設置しました。

「多くの高齢者が毎日生活している施設で、災害時にライフラインが止まると困ってしまう。電気があれば吸引や医療機器を動かすこともできる。介護や福祉のことだけではなく、気候危機にも貢献できるんだということ」で発電所を設置しました」

このように、現場の声を直接うかがうなかで、気候変動は環境問題にとどまらず、健康や福祉、生活の脆弱性（ぜいじやくせい）と深く結びついた「交差性」の課題であることが、はっきりと見えてきました。

猛暑により学校の屋外活動が中止され、子どもたちは十分に体を動かす機会を失っています。体温調節がむずかしい障がいのある方は、より深刻な健康リスクにさらされます。また、家庭内での熱中症死亡者の多くが冷房を使用していなかったという現実もあります。

私は、幼いころから特別に自然が好きだったわけではありません。ただ、環境問題は



## いまい えりな

1996年生まれ、神戸大学卒。市民・若者の声を気候政策に反映させる活動や、神戸石炭訴訟に関わってきた。現在は環境・エネルギー分野のコンサルティング会社に勤務しながら、一般社団法人市民共同発電サンサンすいたにて、市民共同発電所づくりを通じたエネルギーシフトの実践をおこなう。

これほど重要だと言われているのに、なぜなかなか解決しないのだろうと疑問を抱いてきました。転機となったのは、大学生のころに参加した国連気候変動枠組条約締約国会議（COP）です。化石燃料産業による大量のCO<sub>2</sub>排出や、日本が途上国の事業に関与し、現地で人権問題が生じている現実を知り、強い危機感を覚えました。

帰国後、通学していた神戸市内で石炭火力発電所の増設計画が持ち上がっていることを知り、気候変動の影響を強く受ける若い世代として、訴訟の原告として参加することになりました。裁判は二〇二四年に一区切りを迎えましたが、現在のサンサンすいたでの活動は、どちらも「エネルギーシフト」を地域のなかから進めようとする実践だと捉えています。

「交差性」は社会構造だけでなく、私たち一人ひとりの人生のなかにも存在するのではないかと感じています。いま、市民共同発電の活動を通じて福祉分野と関わる機会が増えています。ですが、ふり返れば、幼いころからその接点は私のなかにもありました。

祖父は退職後、視覚に障がいのある方のボランティア活動をはじめ、私はよく付き添っていました。山歩きの会では、段差の前で声をかけ、見えている景色を言葉で伝えながら歩きますが、当時小学生だった私は、先に息が上がってしまうこともありました。そこには、誰かを「支える側」と「支えられる側」に分けるのではなく、同じ時間を共有しながら過ごす感覚がありました。

会社と家の往復だけでは、関わる人や世界はどうしても限られてきます。だからこそ、自分の時間を少しでも社会的な活動に割き、あえて多様な人との出会いをつくる。そのなかで、さまざまな交差性に気づき、見えてきた課題に目を向け、ともに考えていく。そうした積み重ねが、だれにとっても居心地のよい社会につながっていくと考えます。

# 研究と実践と運動の拠点として

「真田理論の現場的意義を考える」と題した第三〇回合宿研究会 in 京都には、会場とオンライン参加を合わせて、一二〇名を超えるみなさんにご参加いただきました。企画当初は、理論学習会ということもありハードルが高いので、参加者の多くは研究者と福祉現場の管理職になるのではないかと想定していました。しかし、事前打ち合わせを経るなかで、「理論はむずかしいから管理職を対象に」ということではなく、真田理論がいまの福祉現場で奮闘している職員にどうひびくのか、ひびかないのか、むずかしくても現場を担っている若手の職員も含めて対象とすることに挑戦しなければ、「現場的意義を考える」ことにはならないのではないかと意見をいただきました。そこで、一般社団法人福祉経営全国会議と全国福祉保育労働組合の共催をえて、事業経営と労働組合からも報告をいただきました。それによって研究者、福祉現場、労働組合と参加の幅も広がりました。

今号の特集のなかでも指摘されていますが、社会福祉における新自由主義的改革のもと、福祉現場においても、職員の階層化や分断がすすんでいます。研修も、職歴や役職別のもが増え、たとえば管理職と現場の職員が同じ話を聞いて対等に意見交流ができる場合は、少なくなっているのではないのでしょうか。研究者、管理職、労働組合、それぞれの立場からの感想をいただきながら、研究と現場と運動をつなぐ、総

合社会福祉研究所ならではの研究会になったのではないかと感じています。

合宿研究会のテーマを「真田理論の現場的意義を問う」としたのは、真田理論が万能で正解だからそれを学びましょう、ということではありません。真田<sup>な おし</sup>先生が亡くなられて二〇年が経ち、先生が想定された以上に社会保障・社会福祉の改悪がすすみ、あらたな課題も生まれています。ですが、そもそも社会保障・社会福祉とはなにか、どういった歴史から生まれ、社会のなかでどんな役割を担うのかという、そもそもをふり返るときに、やはりとても大切な理論です。

対立と分断を強化する新自由主義的な社会のしくみのなかで、そのことが、社会保障・社会福祉にもよりいっそう深刻な影響を及ぼしています。いまあらためて、分野や立場を越えて寄って立つ理論的支柱を一緒におさえていく作業が、共通言語を確認し、分断にあらがう一つの手段になるのではないでしょう。研究と実践と運動の拠点として、総合社会福祉研究所がそうしたプラットフォームになれるのではないかと期待する声もいただきました。会員・読者のみなさんと一緒に、次の研究活動につなげていきたいと思っています。

(編集主任 申 佳弥)

